

第68回 男鹿駅伝競走大会イベントレポート（スタッフ編）



寒風山からの夜景（写真提供：男鹿なび）

レポートの最後は、チームスタッフの直筆感想をお届けします。

<<前田監督レポート>>

私は、現在、飯能工場に隣接する新電元工業健康保険組合に出向し、新電元グループ全体の従業員やご家族の皆さまの健康増進・疾病予防のため、事務長という立場で保険給付や保健事業の運営に取り組んでおります。

昨年度までは、常に数人の故障や体調不良の選手を数人抱える中で、駅伝で結果を出すことを目標と掲げるチームとして、あまりにも不甲斐ない状況が続いておりましたが、今季を迎えるにあたり、各々の選手がチームの問題点や取組課題の意見を出し合いスタッフと共有することで、チームに「自主性」が芽生えてきました。

この事がきっかけとなり、春先くらいから故障者や体調不良者が減り、男鹿駅伝前の一ヶ月間はほぼ全ての選手が、全体で実施するポイント練習をこなせる様になり、男鹿駅伝の一般の部の優勝は当然のことながら、有力大学とも、どこまで戦えるかを目標に練習を重ねてきました。



前田監督

駅伝直前で、一般の部に関西地区の強豪チームである山陽特殊製鋼さんが出場することが分かったときは動揺もありましたが、現在のチームの立ち位置を把握するには丁度良いライバルの参戦で更にモチベーションが上がりました。

レース当日は、鈴木社長や堀口工場長をはじめ、秋田新電元の松尾社長、真坂工場長、他大勢の従業員の皆さまが現地応援及びサポートに駆け付けて頂く中での駅伝でしたし、朝から気持ちが高揚することもありましたが、監督として冷静に指示、伝達をすることが必要なため、自らを客観視して選手を各中継地点に送り出すことに徹しました。

そして、レース中は監督車に乗車して状況を見守りましたが、1区のスタートだけは見ることが出来ないため、先行して9.1 km先の監督車待機場所で親崎の到着を待ちました。

待っている間はもどかしく、目に見えないレース展開を想像しては緊張感だけが膨らみ、落ち着きませんでした。白バイの後ろで親崎と東洋大学さんの選手が先頭争いしている姿を確認した時は思わず鳥肌が立ちました。

そこから慌てて監督車に乗り込み、選手へのハントマイクを通しての声掛け、給水を行いました。1km毎のLAP、前のチームとの差を伝えるときは、特に選手に伝わりやすいような声掛けを意識しました。

レース展開は、事前に予想していた通りに1区親崎、2区西沢の快走があり、2区が終わった時点で、一般の部のライバルと警戒していた山陽特殊製鋼さんには3分の大差をつけ、先頭を走る東洋大学さんにも僅か12秒差まで詰め寄り、最高のスタートを切りました。

その後も、練習内容やコースの適性上で心配のあった3区渡辺、4区小原、5区佐野が不安を払拭する自信に満ちた熱い走りを披露し、6区石原がベテランらしい落ち着いた走りにつながると、アンカーの加藤が序盤から攻める走りで東洋大学さんを追いかけて、途中で腹痛に襲われるアクシデントはありましたが、気合で持ちこたえて一般の部の優勝テープを切ったときは、久しぶりに心の底から感動を覚えました。

これまで監督をやっていて一番嬉しかった瞬間かもしれません。



前田監督

レースを振り返ると、今回の駅伝は序盤の1、2区が予想通りに本来の力を発揮してくれ、序盤から優位にレースを進められました。

そのため、3区以降の選手が落ち着いた走りが出来、一般の部優勝につながったと思います。個々のトラックレースの持ちタイムでは格上の山陽特殊製鋼さんに競り勝てたことはチームとして非常に価値のある結果と捉えております。

レースの課題としては、大学の部で優勝を飾った東洋大学さんを最後まで視野に入れながら追いつけなかったことです。

来年は大学の部も含めて一番初めにゴールテープを切れる様、チーム一丸となって日々の活動に邁進します。



若かりし日の前田監督の勇姿

今後については、休暇を利用した菅平・妙高高原・東部湯の丸合宿を経て力を蓄え、年間最大の目標レースである11月3日の東日本実業団駅伝で結果を出すことを第一に活動して参ります。



臨本城跡から船川方面を望む（写真提供:男鹿なび）

最低でもチーム目標とする4時間切り（3' 05" 切/km）を達成し、少しでも東日本の強豪チームと競り合える様なレースをして「新電元工業ここにあり」と皆さまに感じて頂けるよう、結果にこだわっていきたいと思います。

それには故障・体調不良者は絶対に出せないので、日々の継続した練習もありますが、体調管理の面も徹底して管理する必要があると考えます。

最後になりますが、今回も鈴木社長や堀口工場長をはじめ、秋田新電元の松尾社長、真坂工場長、他大勢の従業員の皆さまが現地応援及びサポートに駆け付けて頂いており、チーム全体として高いモチベーションと集中力を発揮出来たのも、この様な素晴らしい環境があったからだと思っております。改めてこの場を借りて御礼申し上げます。

また、日頃の活動に理解頂き、今回の遠征についても選手達を快く派遣頂いた職場の皆さまに対しましても感謝申し上げます。

私たち陸上部は、与えられた環境に感謝の念を持ち、その中で最大限の努力を重ねた上でレースに出場して、その結果をもって従業員の皆さまに少しでも元気を与えることが出来れば、それが自己の成長にもつながり、また、結果的に企業活動に寄与するものと考えます。

今後も駅伝を主体として活動し、個人としてもチームとしても成長出来る様、活動に邁進して参りますので、引き続きの温かいご支援・ご協力をお願い致します。

(終)

<< 富士コーチレポート >>

私は、現在、工場管理部施設管理課に所属し、設備投資に関する答申内容の精査や承認のほか、部門の管理業務全般を担当しております。

昨年度の東日本実業団駅伝での惨敗から、チームの立て直しにあたり、どのような取り組みが不可欠かを選手サイトで考え、選手総意としてまとめたことを行動に移していくところからチームが再始動しました。

チームの課題であった「集団でのポイント練習の実施」において、徐々にではありましたが、故障から復帰した練習参加者が一人二人と増えていき、そのような中で“*For the team*”という姿勢が醸成され、個々の役割や立場を見極められる選手が増えてきたことから、「チームが変わってきたな」「絶対により結果につながる」という手応えが日ごとに増していったことを覚えています。



一般の部優勝の表彰を受ける選手たち

今大会、一般の部での優勝はもとより総合優勝（大学生含む）してこそ、次の東日本実業団駅伝へつながっていくとの思いから、チームとしての目標は「総合優勝」を掲げ、勢いよく秋田へ乗り込む意識でいましたが、参加チームリストを確認すると、関西実業団に所属している強豪チームの山陽特殊製鋼さんの名があり、「弱ったなあ」という気持ちにさせられました。

しかし、チームの現在地を知る上では格好の相手であり、チャレンジャーの気持ちで引くことなく攻めの姿勢でレースに臨みました。

レース前は、調子の良い選手を1、2区に配置し、強化チーム相手でも先行して優位にレースが進められるという自信があったため、緊張よりもワクワク感の方が上回っていました。

ただ、レース前に荷物の受け渡しをする際、6、7区で使用するストレッチマットを車に積み忘れてしまい、選手には申し訳なかったなという反省があります。

すみませんでした。（実は自分が一番緊張していたのでしょうか・・・）

レースについては、3区の付添いを担当しましたが、当時入ってきた情報によると一般の部においては、1、2区で先行して逃げ切るパターンが見事に的中しているとのことでしたので、とても興奮したのを覚えています。



富士コーチ

また、2区終了時点で先頭と僅か12秒差の総合2位でレースが展開されており、目標とした「総合優勝」が狙える好位置でレースを進めることが出来、後半区間の選手は自信を深めた中で走り始めることが出来たのではないかと思います。

ちなみに、今大会においても秋田新電元の皆様のご協力により、松尾社長をはじめ、沢山の方のご声援、また3名の方に選手の付添いをご担当頂きました。

男鹿駅伝はレースの最新情報がネット等でアップされることのない大会であり、付添いの方には、各中継点で先頭や後方とのタイム差、順位等について、持っているあらゆる情報をチーム内に発信する役割も担っていただきました。秋田新電元の皆様、あらためまして御礼申し上げます。



若かりし日の富士コーチの勇姿

レースを振り返りますと、昨年の東日本実業団駅伝から選手たちがよく考え、それを行動に移してきたことによる努力が、ようやく「優勝」という目に見える形で表れたことと思いますし、進んできた方向に間違いがないことを証明出来た大会でした。

まだチーム改革は道半ばであり、レースで浮彫りになった課題を克服しなければならないことは選手自身が十分把握しており、そこへの潰し込みを行うことによって、更なる自信を糧に東日本実業団駅伝を迎えられるものと考えます。

今大会の目標に掲げた「総合優勝」には45秒届きませんでした。総合優勝した大学チームの監督（大学時代の恩師）から、沿道にいる私に向かって、「今年は新電元強いね～」と伴走車から、お褒めの言葉を掛けて頂きました。

ここ最近の大会では、大学チームに何分も差をつけられ完敗だったのですが、今年は最終区間まで見える位置で推移したため、簡単に勝たせてもらえないなという感想を持ったようで、こういった所にも今年のチーム力を感じましたし、他チームに対してインパクトを与えた大会であったと感じます。

今後は7、8月に課題を克服すべく、合宿を通じてしっかりと走り込みを行い、秋口にはロードレース等での好結果によってチームを勢いづけ、11月3日に行われる東日本実業団駅伝に照準を合わせて、総力戦で臨んで参ります。

具体的には「平均3分5秒/km」の4時間切りを達成し、チームが大きく飛躍・成長出来たと実感出来る駅伝にしたいと考えております。

その後は、個人戦で個々の能力アップを行い、来年行われる奥むさし駅伝、埼玉県駅伝でも好結果を残せるよう戦って参ります。

最後に、鈴木社長をはじめ皆様には、日頃より陸上部に対しまして、ご理解・ご声援を賜り、誠に有難う御座います。

私たちの活動は会社や職場の皆様のご理解があってこそ成り立つものであり、活動機会を与えて頂いている皆様方のご配慮にはスタッフ、選手一同大変感謝しております。

我々の活動意義は、従業員の皆様方に対して日頃の感謝を走りで表現することにより、元気や活気を与えられることではないかと認識しております。

特に駅伝においてはチームの結束力や応援者も含めた総合力が試される場であり、より多くの元気を与えられる場であると考えておりますので、今後も駅伝を主に元気ある活動を継続して参ります。

陸上部への引き続きのご声援を何卒、宜しくお願い申し上げます。



【総合成績】 一般の部

距離 : 64.7km

順位 : 優勝/41位 (大学を含む全体順位 : 2/52位)

タイム : 3時間22分14秒 (目標 : 総合優勝)

※ 今大会、区間賞は2区間のみでしたが、一般の部では前半に他チームから大きなリードを奪い、総合力で優勝を勝ち取った新電元チーム。

大方の予想では、今年初出場した関西の強豪チームに対し、選手層の薄さから、戦力的に苦戦を強いられると思われていましたが、選手たちは逆にそれをプレッシャーに感じず、のびのびと思い切って走ることが出来ました。

また、レース後に鈴木社長の仰られた「みんな、やればできるですよ!!」のお言葉は、選手たちやこの駅伝、競技活動だけに留まらず、「やる気をもって真剣に取り組めば、できないことはない。」という、当社グループで業務に励んでいる従業員の皆さん全員に向けた社長からの大きなメッセージであると受け止めました。

以 上

男鹿駅伝レポートを最後まで読んで頂き有難う御座いました。

今後とも当社チームに対する温かいご声援を宜しくお願い申し上げます。